名古屋芸術大学キャリアセンター紀要　第11号　083〜094頁（2022）

娯楽マンガ作品を教材に（3）山田芳裕作『望郷太郎』

Using entertainment manga works as teaching materials:
"*Bokyo-Taro* (Taro's adventure to Japan)" drawn by Yamada Yoshihiro

茶谷　薫　*CHATANI Kaoru*

はじめに

筆者が以前述べたように、「学習マンガ」と、それとは異なる一般の「娯楽マンガ」には差異があり、娯楽マンガを学習に役立てられれば、大きな学習効果があると期待できる〈1,2〉。学習内容を分かりやすく漫画化した「学習マンガ」は優れた教材であるが、その目的のため、娯楽性は然程求められない。対照的に、娯楽性が第一の一般的なマンガは、読者を惹きつけるストーリーおよびキャラクター、絵柄、コマ割りなどが洗練され、魅力的で読みやすい。従って、娯楽マンガを教材化できれば、学生や生徒・児童の学習効果は高いだろう。ただし、娯楽マンガは学習内容が明確に目的化されているものではないため、その作品に描かれたものから、具体的な「教材」を選定することが重要となる。

筆者は勤務先の授業において、娯楽マンガを教材にした場合、マンガを好む学生の学修意欲の向上が授業評価アンケート等で得られているため、その具体的な教材化を実践している。本稿では山田芳裕の『望郷太郎』〈3〉から教材の例として使用できる点を列挙する。本稿執筆終了時（2022年3月上旬）は単行本6巻までが刊行されているが、物語は終了していない。本稿では、2月下旬に発刊された6巻を除き、5巻までについて記すこととする。

『望郷太郎』と作者について

作者：山田芳裕

作者の山田芳裕は1968年生まれ、新潟市出身である。東京での大学在学中に講談社の「ちばてつや賞」〈4〉に応募した『大正野郎』が同社発行の週刊マンガ雑誌『モーニング』に掲載され、1987年にマンガ家としてデビューした。講談社や小学館のマンガ雑誌に『考える侍』、『しあわせ』、『やぁ！』、『デカスロン』、『度胸星』、『いよっおみっちゃん』、『ジャイアント』などが掲載された。

山田の作品で最も知られているのが実在の人物・古田織部を主人公にし、安土桃山時代を描いた『へうげもの』〈5〉である。これは10年以上『モーニング』に連載され、単行本も全25巻を数えた大作である。同作は文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞や、手塚治虫文化賞マンガ大賞を受賞し、アニメ化もされた。その連載終了後は、池波正太郎原作の『仕掛暮らし』に取り組み、現在は本稿で取り扱う『望郷太郎』を2019年から執筆している。

あらすじ

物語は500年後の地球、イラク南部のバスラで始まる。主人公は舞鶴太郎という、21世紀初頭の日本人である。太郎は舞鶴財閥グループの跡取り息子で、冷徹なビジネスマンとして日々仕事に追われていた。ところが海外駐在中、地球全体に大寒波が襲来した。地球は氷河期に入り、大多数の人々は凍死し、21世紀の文明社会も失われてしまった。太郎は妻子とともに、人工冬眠し、500年後に目覚めた。しかし妻子は装置の故障か、数百年前に亡くなっていた。太郎は絶望したが、日本に戻り、実態を確かめようと陸路の旅に出る。途中、太郎は時々、21世紀に起きた出来事、教えられた話を思い出し、未来の原始的な社会でも同じ社会の構造と問題があることを感じるのだった。

太郎はシベリア鉄道を目指す途中、パルとミトという二人の男に救われる。彼らは原始的な狩猟採集生活を営んでいた。太郎は彼らの価値観（文化）は受け入れ難かった。彼らの命懸けの「祭り」というイニシエーションを経て、太郎は一人前の「人」として扱われるようになり、ミトは落命する。太郎はパルとともに日本を目指す途中、パルの故郷に寄る。故郷の「西の村」は、近くの「中の村」に併呑される危機にあった。さらに「中の村」も更に大きく文明的な「東の村」に圧迫を受けていた。

太郎の活躍で、西の村と中の村は連合を組み、東の村と対峙することとなる。太郎は戦に巻きこまれないよう、東の村へ逃げたが、その長・アンテの裁定により奴隷にさせられた。奴隷頭はパルの妹・プリで、東の村から大国の「マリョウ」に奴隷として贈られた。マリョウは「マー」と呼ばれる金属の塊など文明的な物を属領に贈り、属領は蜜蝋や奴隷などを貢ぐ。マーはレアメタルを含有する鉱石から作られる。マリョウは軍事・経済を含む文明の力を背景に、多くの集落を併呑してきた。東の村から逃げた太郎と奴隷たちは、マーの原石となる鉱石を発見した。太郎は鉱石を利用し戦争を回避しようと考える。また、マリョウの属領が「一等村」、「二等村」、「三等村」に区分され、一等村ではマーが通貨として流通していることを知り、マーを使えば日本への旅が容易になると考える。

奴隷仲間や東・中・西の村の人々と別れた太郎とパルは再び日本を目指す。彼らはバイカル湖近くのヤープトという大きな村で、マーが流通する貨幣経済を目にし、祭司と村長の政教分離統治について知る。ヤープトは独裁者も奴隷もいない居心地の良い村に見えたが、実はマリョウの属領として重税に喘ぎ、警護兼監視役のマリョウ兵団が駐屯していた。村長は、ヤープト村はマリョウと対等な「同盟」ではなく、実質的な属国に甘んじていることは分かっていた。ただし、一般の村人はそのことを全く知らない。太郎はヤープト村の独自通貨（ヤープトマー）を発行し、マリョウの経済的な介入を阻もうとする。マリョウ兵団長らはその計画を知り、太郎らを抹殺しようと考える。

『望郷太郎』で学べる内容

『望郷太郎』においても様々なことを学ぶことができる。以下、具体例を挙げ説明する。

地理・歴史

主人公がイラク南部からシベリア鉄道沿線近辺を東へ移動し、日本を目指す設定となっているため、『望郷太郎』では大多数の日本人が知らない地名が頻出する。しかし、そこには豊かな地下資源があり、紛争が起きやすい中東や旧ソ連の中央アジア近辺のため、世界の政治経済、歴史を考えるうえで重要である。

主人公が目覚めたイラク共和国のバスラは2022年現在、同国南部の中心、首都バクダーッドに次ぐ第二の大都市である。原油パイプラインの終点であり、原油やナツメヤシの実（デーツ）などの積出港としても重要である。ここには人類最初の王権成立といわれるエリドゥという古代メソポタミア文明の都市国家があった。ササーン朝ペルシャ時代には、政治都市としても発展した。石油取引よりも遥か以前から、肥沃なチグリス・ユーフラテス川の穀物を集積する場ともなっていた。ペルシャやアラブの商人がインド洋貿易で寄港する、ペルシャ湾最大の中継地ともなった。戦乱やモンゴル帝国の被害で衰退し、アッバース朝滅亡後は廃墟のようになったが、オスマントルコ帝国時代から再び発展し、第一次世界大戦後はイギリスの補給基地、石油積出港として繁栄した。重要拠点のため、イラン・イラク戦争、湾岸戦争、イラク戦争など戦乱の犠牲となった。主人公の舞鶴太郎の一族が舞鶴通商という会社のイラク支社をバスラに置いている設定なのは、このような背景があるからだろう。

主人公がバスラを出発する前に広げた地図には、イラク共和国、サウジアラビア王国、イラン・イスラム共和国、カスピ海、黒海、などの地名が出ている。共和国と王国の違い、これらの国々の地政学も重要である。例えばカスピ海からのパイプライン、ロシアとウクライナの領有権争いの場となったクリミア半島を擁する黒海からボスポラス海峡を抜けて地中海へ至るルートは地政学上重要である。

主人公とパルがキルギス共和国の首都・ビシュケクの廃墟で500年前の物資を漁る場面がある。同地は天山山脈を行き来するキャラバンの停泊地であったように、陸路の要衝である。ロシア帝国が占領した際、キルギス人はヒマラヤ山脈西側のパミール高原や、南西にあるアフガニスタンに逃れた。

主人公はそこからシベリア鉄道が走っていることを期待し、西シベリアの中心都市・オムスクに向かった。ここはドストエフスキーの流刑地であり、ここでの過酷な生活が彼の作品にも影響したと言われている。帝政ロシア時代は西シベリアの第一の都市だった。ロシア革命期には白軍と赤軍の激戦地となり、ソビエト連邦政府が都市機能をノボシビルスクへ移したため、第二の都市に転落した。そのノボシビルスクや、アルタイ地方のビイスクも主人公の通過点として作中の地図に描かれている。アルタイは無論、アルタイ山脈に由来し、かつてウラル・アルタイ語族と呼ばれた、アルタイ諸語の名称にもなっている。作品中では、「東の村」はミヌシンスク近辺と設定されている。ミヌシンスクは古代から栄え、遺跡が多く、近代においても農業や交易の盛んな都市である。

主人公が奴隷たちと逃亡する際に、トゥヴァ（この作品ではトゥーバ）共和国とサヤン山脈が登場する。トゥヴァはロシア連邦の一部で、東西にブリヤート、アルタイがあり、南にモンゴルが位置する内陸国である。同地はジュンガルが滅亡した後は清と帝政ロシアの領土争いの場の一つとなった。清朝滅亡後は中華民国領となり、それを引き継ぐ台湾ではモンゴルを含め同国領土と主張していた。レアメタル、岩塩、大理石などを産出する。主人公は21世紀のレアメタルの商取引を通じ、同地の知識を得た、という設定である。

バイカル湖、その南西端のスリュジャンカ、東側のウラン・ウデも示されている。いずれもシベリア鉄道が通る。シベリア鉄道はロシア帝国時代に造られた、ウラジオストックからモスクワまでを繋ぐ世界最長の鉄道で、日露戦争等の兵站を支えるなど、世界史、日本史的にも重要である〔6〕。現在も極東と欧州を繋いで列車が往復している。バイカル湖は生物学的にも重要な、ユーラシア最大の淡水湖で、プレート境界の地溝の陥凹部に該当する。イルクーツク州の東部にあるスリュジャンカの語源は雲母のロシア語であり、ブリヤート共和国の首都のウラン・ウデは、ウデ川と、モンゴル語で赤を意味するウラン（オラーン）を組み合わせたものである。後者からはモンゴルの首都・ウラン（赤）バートル（英雄）も連想される。

主人公が狩猟と採集を主とするパル達と出会い、牧畜と農耕を営み、畑・牧畜・食事の準備に奴隷を使役し、日時計で時間を管理する東の村を経て、通貨を日常的に使う市場を有し政教分離されているヤープト村に行く、という筋立ては、人類史を描いたかのようである。東の村の長のアンテが広い畑を所有し、妻を3人娶った一夫多妻であること、重曹などの膨張剤や酵母の発酵を使わず硬いパンを焼くことも歴史を学ぶ際に導入として活用できる。奴隷には麦・蕎麦・粟・果物・野菜・馬乳を宛がっても魚肉を与えないよう、動物性の蛋白質の価値が高く、逃亡奴隷が出ると奴隷に連帯責任を負わせる設定も人類史を振り返る時に重要だろう。人が増え、食糧を得るための土地を拡張し、自然を破壊してきた設定も、人類の農耕牧畜の発展と関連させて理解しやすい。

主人公の苗字が舞鶴であるのは、第二次世界大戦敗戦後、海外から日本に戻った大勢の人々が辿り着いた港の一つであるからだろう。「戦争は悲惨」で、全てを失い、弱者も殺されるという主人公の危惧は、二度の世界大戦の負の教訓を得た現代の多くの人が持つべき感情である。主人公が東の村との戦に備え、中の村とパルを含む西の村の人々に長篠の戦いで織田信長が採った策を授ける場面もある。また、アンテ一族の瞳の色が薄く、大柄であることから、人の形質に気候に起因する地域差があることを学べる。主人公やプリが奴隷となった描写などからは、かつて世界各地で奴隷にされた人々がいたことを学ぶ際、理解を深められる。現在も実質的な人身売買がある社会問題も学べるだろう。貢物としてプリを受け取るマリョウの使者がプリをチェックする際に歯を見るのは、馬などの家畜を選ぶときと同様の扱いをプリが受けていることを表している。

統治・通貨

貨幣と商品の交換を理解していないパルが、ヤープト村の市場で薬を得ようとした際、窃盗罪に問われてしまう。村の長の裁定でパルは鞭打ちの後、入牢と労働（懲役）の刑を科される。パルを訴えた薬屋の店主は高額の納税をしているから取締り側の仕事は当然だと話す。納税者の権利、行政機関の役割の原初的かつ基本的な形を知ることができる。どの地域の歴史でも、祭司の息子のハッタがパルに教えるように、大勢の文化的な背景が異なる人が集う場では、諍いが起きることがあり、個々人の間で解決できない場合は権力を持つ者がそれを裁定し、ルールに従わない者を従わせる力（暴力装置）があることも理解しやすい。それらのための費用として税を集める徴税制度がある。パル・プリ兄妹は、単独の戦いでは非常に強いが、集団には敵わない。これも国家による統治が進んだ背景を考えさせる場面である。

また、復讐を誓うプリに、主人公は人が恨みや憎しみを抱く起源を感じる。個人間の仇討ちが権利かつ義務としてきた社会から、それを国家の司法権に委ねる近代社会への変化を教えることができよう〈7〉。マリョウに家族を焼き殺された恨みを持つアンテが、マリョウの使者に復讐し、アンテに酷使された村人や奴隷が彼の一族を追放する場面は、人の復讐心の強さを改めて感じさせられる。アンテ一族が追放となることは、「狼人間」としての追放や〈8〉、遠島の刑を理解する助けとなろう。

マリョウは東の村もヤープトも直接的な統治はしない。長のアンテや村長のコロを置き、間接統治をする。兵団長らヤープト兵はヤープトの法を表向きは遵守し、対等な同盟関係でいる。ヤープトは属領であるが、その方が、村人が勤勉に働き、結果的にマリョウが得る上納金が増えるからだ。これは大国と小国の外交関係や、実質的には拒否権を有する常任理事国が圧倒的に有利な国連の安全保障理事会の場面などで、今も見られることではないだろうか。

この作品では、通貨・貨幣について考えることもできる。主人公はマーという貨幣を使えば日本までの旅が楽になると考え、マーの原料となる鉱石を利用しようとする。またアンテが食べ物をマリョウから交換してもらうためにマーを使えば、近隣の小さな村と戦争をする必要はないと説得する。これらは貨幣の利便性を示している。

ヤープトの「鉄売り」のターラが独自通貨（ヤープトマー）の貨幣を鉄で作る場面で、マーの原石を担保にしようと主人公が思いつく場面がある。謂わば「マー原石本位制」であり、これはかつての金本位制を理解する一助となろう。鉄のマーを欲しがる人はいないとターラは疑うが、主人公は紙幣が流通していた現代の話を伝える。

また、貨幣（かね）を「あっても使えないが、皆の心を動かし持っていることだけに意味があり国が保証するもの」と主人公に言わせている。国などが保証するものを法貨と言うが、貨幣はそれだけではない。高木久史によると、他の物と交換できるという予想が成立すれば良く、国や権力者が保証しなくても成立し、むしろ歴史的には民間が作った通貨

を政府が追認する形を採ってきたという〈9〉。高木のまとめによれば、貨幣は、交換手段となり、価値尺度があり、未来に商品と交換する価値蓄積手段であり、支払い手段を備えるものだという。また、金・銀・銅などの金属が貨幣の素材になった理由を、高木は耐久性があり、加工性が高く、実用性がなく、希少だが過度に希少ではないことが重要だと述べた。ヤープト村では長期保存ができる（耐久性がある）塩がマーの代替物だったと語られる場面も、かつての塩が単なる調味料ではなかったことを連想させる。

一方、少なくとも現在は、通貨には国家の保証が重要であることも論を俟たない。Facebook運営会社のMeta（メタ）がデジタル通貨Libra（Diem）の発行を断念した。「規制当局との対話から、プロジェクトを進められない」という同社CEOの発言や、「Diemは最終的に、世界の基軸通貨を作っていきたいというミッションがあった」が、「マネーロンダリングのリスク」や「一企業が新しい通貨を作るってどういうこと」か「という金融当局からの問いに答えられ」ず、頓挫したという金海寛の解説からは、通貨を民間が発行することに国家の規制が働いたことが窺える〈10〉。これは主人公らが、重税に苦しむヤープトを救おうと独自の通貨（ヤープトマー）を発行しようとした時、それに危機感を覚え、妨害するヤープトの兵団長らが主人公らの命を狙うほどの重大事だという設定を踏まえれば理解しやすいだろう。また、主人公が父親から「金の発行権と管理権を持っている者には逆らえない」と忠告される場面も同様である。

何物にも交換できるという前提で流通する貨幣の力は非常に強い。この作品では、主人公が追っ手にマーの原石を取引材料にした場面を見て、奴隷のムークがマーの力を改めて理解する。そのムークらが東の村から離れ、マー原石のある地区に移住し、見下した人々を見返そうとすることに、主人公が不安を覚える場面もある。いずれも貨幣に抱く人々の欲望が引き起こす悲劇を予感させる。

科学・技術

大規模な火山噴火や地震などの自然災害が地球の歴史、生物や人類の歴史に大きな影響を与えてきた。主人公が遭遇した大寒波による大量絶滅もそうである。ハッタが赴いたユーラシアの西方は灰に覆われ生物がいないことや、パルが祖母から聞かされた「初めに太陽が怒り、すべて寒くなり、大地が怒り　空が赤くなり、太陽が消えこの世が凍てついた」という話は大噴火の後に、上空高くを漂い続ける火山灰が日光を遮り、寒冷化が一層進む仮説を元にしているだろう。地球の温暖化もだが、寒冷化も人類にとっては大きな脅威である。

蜂蜜を発酵させる蜂蜜酒が出てくるが、糖類があればコウボによるアルコール発酵で比較的容易に作れるもので、アフリカの街道筋などでは道端でも売られている。馬乳酒を蒸留し、度数の高いアルコールを得る話も出てくる。アンテ一族の残飯の、魚のヒレや骨で出汁をとる場面もあるが、出汁は核酸の材料となるものやアミノ酸などであることが学べ

る。ミントを歯に当て歯磨きするシーンがあり、多くの練り歯磨き（歯磨き粉）に添加してあるミント（ハッカ）の成分・メントールについて学ぶ際の導入となる。また、病に倒れた主人公にパルが、ミントを摂取し排尿を促すよう伝えるシーンでは、漢方などでミントが解熱や健胃などの用途として処方されること、排尿で身体に有害な尿素を体外に排出したり、体内の水分過多を解消したりするために有用だとされることが理解しやすくなる。

パルが川の水の味で故郷と同じ水系だと分かる場面もあり、ここからは地域ごとに土壌の組成が異なることが学べる。マーの材料として磁石、炎色反応で鮮やかに発色する金属があることも分かる。炎色反応の色は花火の美しい色に利用されている。ニッケルは炎色反応を示さないが、非鉄金属のレアメタルとして貴重である。また、「腐らない軽鉄」と書かれたチタン製の鍋が出てくるシーンでは、眼鏡のフレームなどにも使われる酸化チタンの腐食しにくい性質が理解しやすくなる。

パルらが東の村から侵略してきた人が持つ油を略奪したうえで水を浴びせるシーンが描かれている。中央アジアや南極などの厳寒地帯では、水が忽ち凍結し、上瞼と下瞼を強固に接着させるなど、水が凶器となることが分かる。焚火で温まろうにも油という着火剤が無ければ、木の枝は着火し辛いことも理解しやすい。薪などを燃やしたエネルギーで暖を取る場合は、煙が出、それにより他者に発見されやすくなることも別の場面で理解できる。

また、ミトがヒョウに襲われ亡くなったシーンでは、パルがミトについて「眼に頼りすぎ」ており、「動物には毛があってよく感じられる」と話す。体毛は保温や体を大きく見せるなどの機能もあるが、毛の動きで微弱な空気の動きを感じる機能もあることが改めて理解される。

ターラが蜜蝋で剣の型を作り、その周囲を土で固め、蜜蝋を流し出し、その穴に熔けた鉄を入れ、剣を作る場面がある。これは現在も製造業や美術の立体造形等で非常に重要な鋳造技術である。

主人公が地動説を説明した相手のメルクが、天も地も動いている、とさらに正確なことを述べ、主人公を驚かせる場面がある。宇宙全体が膨張していることなど、地学や物理学的なことを説明する導入となるだろう。

文化

この作品には、鳥葬、誰かの肉を頂くことでその人を自身の体内に取り込んだり、生かしたり、慰霊したりする感性、強い動物と生死を賭け戦うことで一人前の人となる意識、生活の狩りのための道具と祭りの戦いのための道具を峻別すること、興奮することで辛さを癒す人の心性、手を傷つけて出した血液で判を押すこと等が出てくる。主人公が「人」としてパルらに認められた後、腹に太陽のような形の傷を付けられる。何かを表象した傷や刺青などの身体加工による装飾と等価である。また、祭りなどの場では舞踊があり、日常的に飲まない酒を飲み、顔面に模様を施したり仮面を被ったりし、トーテムポールのよ

うなものを立てるなど、文化人類学的な知見をもとに描かれた場面が頻出する。また、ポトラッチのように村の威信を示すための過剰な贈物合戦の末に生活に不可欠な木舟や家屋を燃やし、村人が命まで落とす場面もある〈11〉。

パルの村では通貨がなく、強い者が弱い者に施すことで交換と人の繋がりが成り立っている。その文化が通じない人々は、パルにとっては「人」ではない。これは、かつて（もしくは今でも）、自身の仲間以外は所謂「人間扱い」しなかったことを連想させられる。

肉を禁じられたプリたちが、隠れて狩ったトナカイの腹に鳥を詰めて土に埋めておくのは、アザラシの腹に鳥を詰めるキビヤックというイヌイット達の食を参考にしているだろう。アラブのザータル（ザアタル）という、オレガノやタイムなどを指すハーブを使う場面もある。ローズマリーのお茶を飲むシーンもある。捕獲した獲物から速やかに血を抜くことで臭みを無くし、その血液も洗った腸に詰め血のソーセージを作り、腐敗を防ぐために肉も冷やす場面も、屠った家畜を余すところなく頂く遊牧民族などの暮らしを連想させる。パルは鳥の羽を利用するが、鳥そのものを神聖なものと考える文化で育ったため殺さない。神聖もしくは自身の祖先だとされる動物を殺さない風習は多くの地域で認められる。

主人公が未来人たちに感じる文化的なギャップは、現在もあり、グローバル社会ではこれを受容したり、理解を求めたり、妥協したり、折衝したりすることは重要である。

死

作品では登場人物が死を身近に感じることが描かれている。主人公は「葬式でしか死を目の当たりにしない俺達とはえらい違いだ」と思うが、この問題については多くの識者が語っている〈12〉。

他人事の死であれば、「コストはかかるが最大支出の戦争を防げる」と考えていた主人公だが、自身が戦を回避するために死ぬよう突き付けられると必死で考え、空手形を呑ませるシーンがある。死を迎える身体とともに自我があることを忘れがちな我々に、改めて死を考えさせる場面は、この作品には多数出てくる。

文字、数、時

多くの人が集まり、大量の物を管理する際、文字や数、時間が重要になる。しかし、それは人を幸福にするかどうかは分からない。それを端的に示したのが、主人公が作った日時計をパルが壊す場面である。パルは空や匂いや音を身体で感じて「時」を決める。祭司のメルクは文字を書きつけた白樺の皮を頒布し、心づけを得ているが、これ自体にメルク自身は疑問を抱いている。人は文字を駆使し、文明が発展したが、それが人間全体や地球環境全体に好ましいか判断できない。そのことを暗示するかのようだ。

文字についてはパルが、字は嘘を本当に見せるものと言い、祭司のメルクが文字に頼りすぎる嫡子に危機感を覚える場面が描かれている。人を見ず、データばかりで診断すると医

療を批判的に捉えることとも通じる。そして何より、淮南子や泰族訓にある蒼頡（倉頡）が文字を発明した晩に鬼が哭いた伝説が連想される。蒼頡は中国語のPC入力法のうちの一つ（倉頡輸入法、蒋経国が命名）の名称ともなっている。

現代社会の相対化

主人公は、現代社会では財閥企業グループの御曹司で、休暇なしの18時間労働もこなすときもあり、家族サービスもほとんどできなかったという設定である。そのため、東の村で奴隷であったとしても１日８時間労働で、休憩も休日もあり、魚肉を与えられないことを除けば食事の心配も不要な気楽さを感じる。無限の利益追求とノルマに追われるストレスがなく、弓などで獲物を得るなど自身の五感と肉体を駆使し身体性が感じられる生活の方が、文明的な現代社会よりも良いとも思うのだ。過労による精神疾患や自死の問題を抱える今の日本を相対的に捉える場面である。21世紀には利益追求に邁進した主人公は大量の鉱石をヤープト村の善良な人々が使うことを許容でき、「成長拡大支配欲求が湧かない」、快適な食事と睡眠と自由があれば良いと思う。また、マーを拒否するパルを説得しながら、貨幣は道具に過ぎないにも関わらず、かつての自分は、貨幣が増えるための道具に過ぎなかった、と感じる場面がある。これは消費欲を喚起させられ、住宅ローン返済のために過労に陥る現代日本の病理を相対化する契機となろう。またヤープトの祭司・メルクが、嫡子のメータがマリョウ側に付き、弟のハッタや主人公を裏切る理由として、メータが発展しないといけないと信じ込む病に冒されているからだと述べる。経済発展が何のためになるかを考えずにシステムだけが動き続け、人々や環境の問題が置き去りにされている社会の問題を考えさせられる。

現在とは対照的な、未来の原始的な社会でも村と村の戦が主人公を苦しめる。戦を回避するためのポトラッチで敵も味方も経済的に困窮する慣行を嫌い、パルも安全な村を出て、動物と戦って死ぬリスクを採ったことが説明されている。戦争や虚栄心が人間を不幸にしている現状を、相対化するために重要な描写である。

主人公がバスラを出立し、シベリア鉄道まで歩くとき、靴底が剥がれ、足底がマメだらけになり、荷物を入れていたスーツケースのキャスターが破損する。食べ物が尽き、周囲の野生動物を捕獲しようとしても捕らえられない。それは筆者を含む多くの都市生活を営む現代人の持つ弱点であるが、日常的には全く意識されない。しかし、大きな災害が起きた場合、自身の身体と周囲の人と事物にしか頼れないことを鑑みれば、実際は重大な問題である。

そのシベリア鉄道について、パルは「過ぎた物を造ったら過ぎた分だけしわ寄せがくる」と現代文明への疑義を呈するような台詞を発する。また、パルは東の村の兵士の動きを鈍いと感じたり、マーに振り回される人々に関わらないようにしたりするが、これも現代文明を相対化させる視点である。

現代社会を相対化する試みは数あるが、近年、日本国内だけでも、坂口恭平がホームレスの人々の生活から得た視点〈13〉や、安冨歩が牧場の馬と接する中で得た気付き〈14〉、平川克美が感じた現代社会への違和感とそれを踏まえた実践〈15〉などが書籍となっている。これらの書籍は新しい人々の生き方や社会の在り方を考えるうえで重要である。『望郷太郎』を読めば一層、坂口らが主張することの意味が分かるようになるだろう。

その他

マーの力を理解し、それを使い、奴隷の自分たちを見下した者を見返す、と意志を語るムークについて、主人公は将来、戦争を仕掛け、マリョウのように他の地を支配するかもしれないという危惧を抱く。また「劣等感を抱く者が」マーの力を入手すれば、誰でもそうなる、とも思う。劣等感や虐待被害の経験などを昇華できないと、支配的になり、時には歴史上の悪人となってしまうことはアリス・ミラーが分析したことである〈16〉。

ヤープトの名称は、沼正三の『家畜人ヤプー』で日本人や日本を指す「ヤプー」や〈17〉、JAPANを「ヤーパン」とも読むことから来ているのかもしれない。マリョウに敗戦し焼け野原になった後、マリョウの一等村になり発展した、という設定は20世紀の日本の対米戦と敗戦後の対米関係を連想させる。また、ハッタがヤープト改革を訴え、村長になろうとしたものの、変化に不安を覚える人々が、ハッタの思いに賛同しないシーンがある。ヤープトに駐留するマリョウの士官や兵団長が本国での出世を夢見る場面もある。いずれも現在の日本を皮肉っているかのようである。

ヤープトの夏祭りで、催し物の手配や、屋台を出す祭組について、ターラから売春や賭博に関わっているから近づかない方が良いと忠告された主人公は、彼らをヤクザだと思う。取締りが厳しくなったが、かつての寺社の祭事ではテキヤと呼ばれた人々がその場を取り仕切っていたことを連想させる〈18〉。

この作品では、トゥルン、プリという、知的でもあり、身体的にも強い女が出てくる。ジェンダー平等が推進されている社会の流れなのかもしれない。

メルク祭司や主人公が人々の心を捉えるため、鳥の化身として高所から飛ぶという危険を冒すエピソードは、ナウシカのように身を犠牲にする者こそ王となる、という赤坂憲雄の論考〈19〉や、飢えた虎のために身を投げたとされる釈迦の前世の話を想起させる。主人公は、人々が巨躯で強靭なトゥルンに挑むパルを英雄にするとともに、ダークホースたるパルへの掛金が「万馬券」のように巨利をもたらすことで、ヤープトマーの権威と実利の大きさを知らしめようとする。この部分は「英雄」の力の大きさとともに、英雄視の危険性をも考えさせる契機となろう。

まとめと今後の課題

『望郷太郎』の連載誌公式サイトの作品紹介には、主人公が「「生きがい」を求め」、「「ヒ

ト」の歴史をさかのぼり、理想の「暮らし」を追い求めるグレートジャーニー」とある〈20〉。主人公が、未来にもかかわらず「原始的な」社会で、様々な困難を乗り越える冒険をしながら、現代日本が抱える問題を我々に提示していく趣向である。学べることは多々あり、上で述べたこと以外にも紙幅の制限で省略したものは多数ある。『望郷太郎』は連載誌が想定する読者年齢よりも幼い、例えば幼稚園児や小学生には推奨し難い残酷な描写や性的な描写があるが、高校生や大学生には学ぶ意味や生活を考えるために重要な教材となるだろう。

2月末のロシアによるウクライナ侵攻（ロシアはその言葉を使っていないが）により、この作品の舞台となっている中東や旧ソ連についても一層学ぶ必要性が可視化されるだろう。また、何より、戦争や統治の本質などを考え、より良い社会を運営するためにも、『望郷太郎』の価値は高く、その続篇が俟たれる。

謝辞

本稿は名古屋芸術大学の個別研究費および平成31(2019)年度および令和3(2021)年度特別研究費（課題名「高大接続教育、大学教育、社会人教育における児童・ヤングアダルト文学作品およびマンガ作品の教材としての利用」）の助成を受けた。また、名古屋芸術大学の教職員の方々にご示唆を頂いた。編集と出版に尽力して下さった名古屋芸術大学図書館の教職員各位、校正にあたられた印刷・製本会社の方にも感謝する。

文献および註

〈1〉茶谷薫、「学習マンガ」ではなく「娯楽マンガ」を教材利用する意義―『スター・レッド』を例に、名古屋芸術大学教職センター紀要9号、2020、1-13頁

〈2〉娯楽マンガ作品を教材に ―『暗殺教室』に描かれた理想の教師・学校像、名古屋芸術大学キャリアセンター紀要10号、2021、63-75頁

〈3〉山田芳裕、2019～2022、望郷太郎、初版、講談社、1～6巻

〈4〉講談社のマンガ家の新人賞。賞の名に冠されているとおり、ちばてつやを選考者とし、年2回開催。受賞該当作品がない年も少なくない。ちばは、『あしたのジョー』作画（原作は梶原一騎の別名義の高森明雄）、『おれは鉄兵』、『のたり松太郎』、『ちかいの魔球』、『紫電改のタカ』、『ハリスの旋風』、『餓鬼』などの少年マンガのみならず、『ママのバイオリン』、『みそっかす』、『ユカをよぶ海』など少女マンガの分野でも活躍した。

〈5〉単行本は2005年の1巻から2018年の25巻まで。ただし単行本の表記は「巻」ではなく、茶道にちなみ「第1服」、「第2服」、…となっている。一部、文庫化もされた。アニメーション作品はNHK BSプレミアムで2011年から2012年にかけて放送された。東海三県の博物館施設や大阪府堺市でタイアップ展示企画があった。

〈6〉宮脇俊三、1983、シベリア鉄道9400キロ、角川書店

〈7〉穂積陳重、1931、法律進化論叢第４冊（復讐と法律)、岩波書店
〈8〉クロード・カトリーヌ・ラガッシュ、ジル・ラガッシュ、高橋正男訳、1989、狼と西洋文明、八坂書房
〈9〉高木久史、2016、通貨の日本史―無文銀銭、富本銭から電子マネーまで、中央公論新社
〈10〉西山里緒、2022・2・17・07:10 AM、なぜフェイスブックは仮想通貨Diemを断念したのか？ コインベース日本法人に聞く、Business Insider、https://www.businessinsider.jp/post-250656
〈11〉マルセル・モース、有地亨訳、2008、贈与論（新装版)、ジョルジュ・バタイユ、生田耕作訳、1973、呪われた部分（ジョルジュ・バタイユ著作集 6)、二見書房
〈12〉養老孟司は、2004、死の壁、新潮社や、2006、自分は死なないと思っているヒトへ―知の毒、大和書房など多数の著作で、死から切り離された都市化された社会を論じている。
〈13〉坂口恭平の、2011、TOKYO 0 円ハウス 0 円生活、河出書房新社や、2012、独立国家のつくりかた、講談社、2020、苦しい時は電話して、講談社など
〈14〉安冨歩、2021、生きるための日本史―あなたを苦しめる＜立場＞主義の正体、青灯社など
〈15〉平川克美、2014、路地裏の資本主義、（株）KADOKAWA、など
〈16〉アリス・ミラー、山下公子訳、1983、魂の殺人―親は子どもに何をしたか、新曜社。原題は「Am Anfang war Erziehung」、英語版のタイトルは「For Your Own Good」
〈17〉沼正三、1970、家畜人ヤプー、都市出版社。同書は後に角川書店、ミリオン出版、太田出版、幻冬舎、辰巳出版などからも出され、石ノ森章太郎などによって漫画化もされた。
〈18〉厚香苗、2014、テキヤはどこからやってくるのか？露店商いの近現代を辿る、光文社
〈19〉赤坂憲雄、1988、王と天皇、筑摩書房
〈20〉モーニング、望郷太郎、作品紹介、モーニング公式WBEサイト、https://morning.kodansha.co.jp/c/bokyotaro.html